改訂版へのはしがき

本書は二〇〇九年末に上梓した拙著『フィクションの哲学』の改訂版である。今回の改訂にあたっては、出版後に気づいた小さな不備の訂正に加え、本書全体の問題構成についても大きな見直しを行ったので、新たな「はしがき」を添え、見直しの趣旨と概要について予告的に説明しておきたい。最も大きな変更点は、フィクションという概念でもってどの範囲の作品群を視野に入れるかという基本テーマの設定に関わる。

本書の初版では、小説その他の言語的な作品に加えて、視覚的要素を交えた劇作品や、さらに絵画・彫刻のような視覚的作品をも視野に入れた包括的なフィクション概念がテーマとされていた。そして、同じような問題意識を持ったケンダル・ウォルトンの理論に準拠しつつ、包括的なフィクションの理論を構築することが当初の狙いであった。

本書においても、そうした包括的なフィクション論の構想は放棄されたわけではない。じっさいま

た、特に本書の後半部において、劇作品や絵画・彫刻を例とした考察が頻出することは、あらかじめお断りしておかなければならない。とはいえ、本書が直接の検討課題としたいのは、小説その他の言語作品を内訳としたより狭いフィクション概念である。視覚的な作品をも含めたより包括的なフィクション論の検討は、また別の機会に譲ることとした。

この変更は、立場の変更ではなく、論述の便宜による。この背景には、初版において、特に視覚的な作品を論じた部分において、スペースの都合もあり、立論の論拠を十分に明確なかたちで展開できなかったことへの反省がある。また、実質的な面でも、視覚的な作品を含めた包括的な理論の十全なかたちでの弁護のためには、依然として準備不足の部分が残ることを率直に認めなければならない。本改訂版では、言語的な作品にターゲットを絞った上で、本書の立場をより詳細に展開したいというのが、目標変更の基本的理由である。

こうした目標変更の結果、本書の後半部については大幅な改訂を行った。なにより、視覚的フィクションをタイトルに掲げた初版の第六章は、いくつかの部分が他の章に移動したのをのぞき、おおむね削除した。また、フィクションの言語行為論とごっこ遊び説を扱った第四章と第五章ついても、初版に比べて大幅な改訂を行った。改訂版の第七章は初版を乗り越える理論的展開を図ったものであり、新規書き下ろしである。具体的な変更内容を箇条書き風に整理すると、以下のとおりとなる。

- 序論から第二章にかけての内容については、いくつかの点で説明を補ったのをのぞけば、初版と本改訂版のあいだに基本的にちがいはない。

- 初版の第三章の多くの部分（第2節〜第3節）を占めていたプラトン、アリストテレスについての紹介は、本改訂版ではプラトンの部分に限定し、かつ最小限に切り詰めた。それに応じて、初版では第四章の最初の二つの節を占めていた内容が、本改訂版の第三章の後半部に移動した。
- 初版では第三章の第3節で片手間に扱っていたグレゴリー・カリーの理論について、本改訂版では、その重要性に鑑みて、第四章すべてを当てて論評を行った。
- ウォルトンのごっこ遊び理論を扱った初版の第四章は、本改訂版では第五章に移し、内容の整理・改訂を行った。
- 視覚的フィクションを扱った初版の第六章は、一部の内容を第四章に移したのを除き、ほぼ全面的に削除した。
- 初版の第七章はほぼそのまま本改訂版の第六章に移動した。
- 本改訂版の第七章は新たな書き下ろしであり、作品世界という概念について、ウォルトンとは袂を分かつかたちでの理論の掘り下げを目指している。

以上の改訂を通じて、言語的なフィクションに関する本書の構成がより明確となり、論拠がより深められていることを願っている。

はしがき

本書はフィクションの概念と関連する一連の原理的な問題に関して哲学の立場から検討を加えようとするものである。哲学の立場からの検討といっても、具体的にどのような哲学者のどのような議論を手がかりにするかについては、検討を行う人間の素養に応じてさまざまな可能性がある。本書の場合、参照される議論の多くは現代の分析哲学の伝統に属している。その意味では本書は分析哲学、あるいは分析美学の本である。

分析哲学の伝統のなかで、フィクションとは何かという問いはかならずしも大きな扱いを受けてきたわけではない。それどころか、分析哲学を科学主義的な哲学と捉え、かつ科学と芸術は対極に位置すると考える人々からすれば、フィクションの問題は分析哲学とは水と油とさえ思われるかもしれない。しかし、じつはフィクションの問題は、けっして中心問題としてではないとしても、分析哲学の伝統のなかでくり返し論議の的になる定番的な論題の一つでもあった。それは何より、「ハムレッ

ト」のようなフィクションの作中人物への指示を伴うかのように見える名前をもちいた発言の意味をどう考えるか、という言語哲学の問題との関連においてである。この問題についてはつとにフレーゲやラッセルによって一定の論評が行われており、またそれとの関連で行われたラッセルのマイノング批判は、たんにフィクションの問題にとどまらず、言語哲学（ひいては哲学全般）の方法論に大きな影響を及ぼしてきた。その後も、フィクションの問題は、《フィクションを構成している一連の発言はどのような言語行為なのか》という問いのかたちで、言語行為論の理論家たちの関心を集めてきたし、それとは一見対照的な、記号論理学の手法を尊重する気質の哲学者のあいだでも、フィクションの問題は、《フィクションの内容に関わる発言の真偽はどのように理解されるべきなのか》という問いのかたちで、すくなからぬ論議が行われてきた。そうした一連の先行研究の総括として、英語圏では一九八〇年代から一九九〇年代の前半期にかけて、フィクションの問題を専門的にとり上げた何冊かの本格的な著書が出版された。[1] それと軌を一にして、わが国でも一九九〇年代のなかば、個性的なフィクション論の出版が相次いでいる。[2] 本書は、一面では、分析哲学におけるこれら一連の議論の批判的総括という性格をもつ。

とはいえ、本書はかならずしも、これらの先行研究からの自然な延長線上にあるわけではない。本書の元来の動機はそれとは別のところにあった。筆者はここ十年あまり、元々の専門分野である言語哲学から関心が拡がった結果として、非言語的な記号、とりわけ画像表現の記号作用をどう分析するかという課題にとり組んできた。そのなかでしだいに関心の中心を占めるようになったのは、あたり前といえばあたり前すぎることだが、絵を見るという知覚経験が、物体の平らな表面を見ることであ

りながら、同時に一定の事物や人物や風景の姿をそこに見ることでもあるという二重性を帯びているという事実である。このことをどう考えるかという点を中心に、グッドマン、ウォルハイム、ウォルトンといった一連の理論家の議論を検討する仕事が、近年の私の研究の一つの織り糸をなしてきた。以前にはただ片手間に触れるにすぎなかったフィクションをめぐる一連の議論にあらためて注目するようになったのも、そうした検討作業のなかにおいてだった。絵画の知覚の場合に成り立っているような、ある知覚経験をそれとは異なる知覚経験であるかのように思い描く、という想像の構造は、ふつうにフィクションと呼ばれる言語的な諸作品に接するさいのわれわれの意識のあり方とどのようなつながりを持ち、またちがいがあるのか。分析哲学におけるさまざまなフィクション論をこうした観点から見直してみたいと考えたのが、そもそもの本書のはじまりである。

こうした視点がフィクションを考える上で唯一適切な視点だと主張するつもりは私にはない。それがむしろ少数派に属する視点であることは私もよく承知している。また、のちほどあらためて論ずるように、フィクションの概念は多分に多義的であって、唯一正しい定義を求めるのは賢明ではないというのが私の考えでもある。しかし、そうではあるが、以前からなじんでいながら、つきつめて検討することのなかった分析哲学における一連のフィクション論について、視覚的な諸作品との関連という視点からあらためて検討を行ってみる作業は、私にとっては多くの新鮮な発見の連続だった。それが読者各位にも多くの啓発的な示唆をもたらすものとなってくれればさいわいである。